

同時代ライブラリー

56

声の狩人

開高健

岩波書店

同時代ライブラリー——

56

声の狩人

開高健

岩波書店

同時代ライブラリー

《近刊》

57 アメリカ外交50年

G・ケナン
近藤・飯田・有賀訳

アメリカの戦後世界政策を構想した著名な外交官ケナンが、該博な知識をもとにアメリカ外交を語り、あるべき方向を提言した名著。

定価一〇〇〇円

58 過去と未来の国々 高 健

59 イ

ヌ
マクローリン
澤崎 坦訳

60 高見順 文壇日記 中村真一郎編

目次

一族再会	一
裁きは終りぬ	三
誇りと偏見	七一
ソヴェトその日その日	九
ベルリン、東から西へ	一三七
声の狩人	一四九
サルトルとの四〇分	一七七
あとがき	二〇三

一族再会

死海へ行ってみた。

イスラエルは全面積が四国ほどの小さな国で、総人口はわずかに二〇〇万ぐらいである。東京はその五倍の一〇〇〇万だから、人口だけから見ると東京はその小さな領域のなかに立派な独立国を五つも持っているということになる。私たちはたいへんところで生存競争をしいられているわけだ。

地図を見るとイスラエルは広大なアジア地帯のいちばんはしつこで、同時にヨーロッパとアフリカがはじまる位置にある。地中海の紺青の波はこの国の海岸でその長い、おだやかな旅を終るわけである。海岸に沿って、盲腸のような恰好でこの国は小さく細長く、空のしたにおちている。その盲腸のさきところに死海がある。そこがソドムと呼ばれている。悪徳にふけつたために神の怒りにふれて亡ぼされたと旧約聖書に記されている土地である。「同性愛」の「ソドミー」という言葉はここからでている。

死海は地球上でいちばんひどい場所だということになっている。白熱した太陽のした、まっ赤な砂漠のなかを自動車で走ってゆくと、やがて死海をのぞむ岩砂漠の山の頂上にでる。それ

は山頂のようには見えるけれど、道標を見ると、『海面』と書いてある。死海の渚まではここからまだ四〇〇メートルほどもありなければならぬ。寒暖計は四三度をさしている。広大な空から透明な火の大波が殺到してくる。岩も土も陽にあぶられ、焦がされて、芯の芯までひかりびきっている。草もなければ木もない。トカゲも走らず、ミミズも住まず、羽虫一匹とんでいない。月の表面そっくりの無数の段丘がおしあいへしあい地平線のかなたまでひろがっている。大地の醜悪きわまる内臓がここにさらけだされている。すりきれて焼け焦げだらけの巨大な粗草をくりひろげたみたいだ。その巨大な凹みの底に濃緑色の水たまりがあり、純白の渚がふちどっている。渚が純白なのは、塩が析出されたからで、砂浜の砂がことごとく天然塩である。この閃光を発して輝く渚の背後にある山はすべて岩塩の彪大なかたまりである。数億トンはあるだろうか。そして、死海の水は、塩水というよりは塩化ナトリウムといったほうがふさわしいような気がらっぱさで皮膚にキリキリ食いこみ、腐らせにかかってくる。まったくの無機物の荒野である。

ためしに泳いでみる。底はヌラヌラする泥で、塩化ナトリウムの濃溶液は熱湯のように煮えくりかえっている。噂どおりに泳げない。おしりが浮いてしまつて体がクルクルひっくりかえり、コルクの栓が波にゆられているみたいだ。かろうじて背泳ができるだけである。煮えたぎる湯のなかを漂よいつつ私はその自然のすさまじさに感動をおぼえた。ここで人間が暮らして

ゆくには、このすさまじい熱と閃光と乾きを克服するためには、絶対自分だけが正しいのだという冷静な狂熱を抱くよりほかあるまい。異民族はたえず空からのしかかってくる太陽や熱や、またかたくなな岩や砂とおなじように、「自然」の一部でしかないのではないか。それは一瞬も油断がならず、たえまない苦闘をつづけて克服し、排斥しなければならぬ自然の一部でしかないのではあるまいか。おなじイスラエルでも北方の山間地帯のガリラヤ湖のあたりは木と草と清澄な水にみたされ、寛容であるが、このすさまじさとなるとどうだろう。昔はもつとちがつて緑や水蒸気にみちていたのだろうか。しかし、旧約聖書全篇をつらぬく、沈痛でもあれば華麗でもある、あの抑制された文体のいたるところに噴出している激情は、これはあきらかに砂漠の産物ではないか。ユダヤ民族の流亡の運命そのものが砂漠の自然とおなじ内心の格闘をしていた。われらこそは神の選民、われらこそは諸王の王、すべての民族はわれらに仕えよという彼らの叫びが彼らを流亡に追いやることとなったのではなかったか……

イスラエルはいたるところに国境線が蛇のように這いまわっている国で、死海もその中央からヨルダンと分たれている。濃緑色の水たまりのまんなかに、まっ赤に錆びついた海防艦が浮かんでいて、渚の立札には、あまり近づくとも機銃掃射を浴びるから沖にはでないようにという注意書がしてある。ほかに渚にあるのは、水浴びの小屋と、小さな料理店と、つぶれかかったような化学工場が一つあるきりだ。その塩化物製造工場も独立戦争のときに半ば破壊されて、

いまは操業してないらしく、煙突やパイプ類はまっ赤に錆びたまま死んでいるのである。ところが、水浴び小屋へ入って、なにげなく水道栓をひねったときにおどろいた。淡水がとびだしたのである。砂漠をくぐってくるのでそれは煮えたぎっていたが、まぎれもなく淡水であった。ほとばしる湯玉をさけようと走りまわりながら私はうなりたくなつた。こんな地の果てのようなところまでユダヤ人たちはえんえん何十マイルかの砂漠をつらぬいてパイプを通してゐるではないか。小さな国なので、全土を歩くのに何日もいらなから、アイヒマン裁判のひまを見てはあちらへいたりこちらへいたりしたが、砂漠といわず開拓地の荒野といわず、いたるところで私は小さなパイプのさきから水が噴いているのを見た。水道管はこの小さな国の粗い皮膚のしたを東西南北くまなく走って、赤土や砂地を緑化しようと、日も夜もなく水をまいているのである。自然の水圧によってパイプのさきではスプリンクラーが回転し、水を四方八方にふりまくようになってゐる。いわばこのスプリンクラーがイスラエルの象徴と呼んでよい。このあたりの地帯では砂漠を制するものだけが生きのびられる。砂漠緑化の情熱がそのまま母国再建の情熱となるのである。せまい水浴び小屋のなかを走りまわりながら、あらためて私はユダヤ人の真摯な敢闘ぶりにうたれた。二千年の流亡のちに彼らはこんなみすばらしい、苛酷な、小さな土にしがみついて必死の汗をそそいでいると私は見た。

十人のユダヤ人が十人とも私に説明する。それは、もう、きまつてそうなのだ。イスラエル

にいる二カ月ほどのあいだ何度となくこれを聞かされた。

「……見てください。緑になっているところまでがイスラエルです。赤いところはアラブです」

丘のうえから彼らは満足げに微風を胸いっぱい吸いこんでつぶやく。アラブの怠惰やたちおくれを非難する口調ではないのだが、自分たちの悪戦苦闘の成果を誇るのにいそがしいのである。そして、それがかならずしも彼らの倨傲な宣伝でないことは事実として眼のまえにひろがる、鉄条網で仕切られた緑と赤のハッキリそれとわかる畑の色のちがいに示されているのである（これが行きすぎてしばしば国境事故が起る。つまり、夢中になって耕やすあまりイスラエルの開拓民がつい鉄条網のむこうまで鋤を入れてしまう。すると、それが「侵略行動」ということになって、アラブの監視兵が発砲したりする。この種のごたごたはたえまない）。

このあたりで私の感想を一ついそいで入れておきたいと思う。いま、イスラエルの人口は二〇〇万ほどだが、全世界にはまだかなりの数のユダヤ人が散らばっている。大ざっぱに見て、アメリカに五〇〇万、ソヴェト領内に二〇〇万か三〇〇万、東欧全域に一〇〇万、西欧各国に一〇〇万、その他、アフリカ、中近東へかけても「アジア・ユダヤ」がかなりの数になる。全員を収容する能力はいまのイスラエルにない。そんなことをするとたちまち破産する。また、

それぞれの国にいる彼らが貧しくとぼしい祖国へ本気で帰郷したがっているかどうか疑問である。しかし、私は、イスラエルへ帰りついたり、またそこで生まれたりしている人間や世代を「ユダヤ人」と呼ぶことは当を失していると思うのである。彼らは、イスラエル人、または、ヘブライ人と呼ばれるのが正しいと思う。たとえば、文化政策として現在のイスラエル政府がとっている政策の一つは、帰ってくるユダヤ人や、また新しく成長するイスラエル人の世代の感性や性格から、いかにして、いわゆる「ユダヤ的」なものを一掃しようかということにある。シエクスピアが典型として描きだした金貸し「シャイロック」の性格を、その悪名高い汚辱の伝統を、いかにしてたたきこわし、一掃して、全く別の新しいイスラエルの性格、たとえば協調や、寛容や、公共への献身や、同情や、平等などといった性格と精神をつくりあげるべきかということに彼らは没頭していると私は見たのである。彼らはユダヤ人ではない。アラブ人とおなじセム族であって、そのセム族のなかの「イスラエル人」なのである。今後私は彼らをイスラエル人と呼ぶことにする。もし外国を旅行してフランスならフランス、イタリアならイタリアで、セム族の血をひくフランス人やイタリア人から金のこととひどいめにあわされたらそのときは泣く泣く大声で「ユダヤ人め！」とツバを吐くことにするが、それは現存する民族ではない。一つの抽象名詞にすぎないのである。現存するのはセム族、またはイスラエル人だけである。

この国の特殊さは新聞売場へ行けば一目でわかる。国語はヘブライ語だから楔形のヘブライ文字の新聞がいちばんよく出まわっているのは当然のことだが、新聞売場にはそのほかイスラエル人の出身国の言葉で印刷された新聞がゴマンとある。英語。フランス語。ロシア語。ドイツ語。イタリア語。チェコ語。ルーマニア語 *etc. etc.* …… ないのは日本語ぐらいのものだろう。東欧辺境のユダヤ人たちがヘブライ語の母幹にドイツ語をくつつけたイディッシュ語の新聞もある。これらの新聞はそれぞれ発行部数が一万とか二万とか、なかには三千部というような小新聞もある。いずれにしても、全世界五十数カ国から帰ってくる人びとが、イスラエルに住みについても、お国言葉がなつかしくて、ヘブライ語の新聞のほかにもそれぞれの言葉で刷られたものを併読しているわけである。町を歩いていて、すれちがいざまに耳にする言葉はたいいていヘブライ語であるが、気をつけていると、やはり世界各国の言葉が聞こえてくる。だから、当然、人びとの容貌もまた、じつにさまざまである。鉤鼻にうけ唇くちくちという「シャイロツク」型の「純種」の顔もないわけではないが、たいいていは混血しあつていて、フランス人、イギリス人、ロシア人、ドイツ人、どうしてこれがおなじ血なのだろうといぶかしみなくなるばかりである。そのうえ、おどろいたことに、中近東やインドやヴェトナムあたりから帰ってくる「アジア・ユダヤ人」と呼ばれる人びと、ことにヴェトナムあたりからの帰郷者となると、なかには日本人の私にまったくそっくりの顔をしている人がいて、つくづくおどろかされる。

彼ら同士でも見わけはよくつかないらしく、私は町を散歩していて、何度ヘブライ語で道をたずねられたか知れない。おそらくヴェトナムからの一族と踏まれたのにちがいあるまい。一度などはタクシーの運転手からタタールかと聞かれておどろいたことがあった。

私の友人のデイヴィッド・ソロモン氏も帰郷者である。彼は妻と二人の子をつれてニューヨークからイスラエルへもどってきた。政府の新聞情報局に勤め、アイヒマン法廷の反対諷間が終って休廷に入ってから私は私をよくあちらこちらへつれていつてくれた。頭がよく、親切で、いんぎんで、誠実力行の気質だった。たいへん博識な男なのだが、その知識人気質にもかかわらずアメリカからやって来たときにわざわざ名前を変更して、それもきわめてイスラエル風に、ダヴィデの英知とソロモン王の栄華にあずかるうという、おそろしく欲張りで派手な名前にしているところが私には少しこっけいに見えた。が、しかし、他の多くの先進諸国からここへもどってきた人びととおなじようにこの民族の選良分子の一人であることにまちがいはない。アメリカの生活を捨てて、この、まだまだ貧しくて乏しくて、危険でもあり、不毛でもある、新興のつらい風土に耐えていこうというのだ。無名の騎士の一人なのだろうと思う。

ハイファの港の背になるカルメル山を、ある夜、私と散歩していて、とつぜん彼は熱い口調で告白をしたことがあった。自分がなぜニューヨークを捨ててもどってきたかということを彼は説明してくれた。

「……おれは子供のときから旧約聖書を読まされて、また、聞かされたもんだ。これこそ文学だ。世界でもっとも古く、もっとも新しい、永遠のベストセラーだというわけだ。しかし、ほんとのことをいって、誰も本気になつてそんなこと、考えちゃいないのだよ。口さきでそういうだけのことさ。ところが、あるとき、おれは、ホボケンを歩いていたときに、とつぜん感じたんだ。ほんとにこれこそ本当の文学なんだ。これこそ美しいものなんだ。そのすべてなんだ。おれたちがこれをつくつたんだとあらためて考えたんだよ。そのときまで口さきでしゃべつてたにすぎないことをとつぜん本気でそう感ずるようになったんだ。あなたにはその感情はわからないだろうと思う」

ハイファ港の夜景の灯を眺め、暗がりと感傷にさそわれた彼は私の耳もとに口をつけるようにして話しはじめた。声はひくいが、その雄弁はむしろ演説にちかいほどだった。私はその熱にうなされたような口調と真摯さに圧倒された。だまって聞くよりほかなかった。男に告白されることが、ときには女に告白されるよりもなまなましく異様な、御し難いまでの肉感にみちていることがあるのにお気づきだろうか。経験されたことがおありだろうか。この場合がそれだった。彼は暗がりになたずみ、木の葉の重く熱い、湿った香りにつつまれて、ニューヨーク人たちの生活をのしり、その虚しさと酷薄さを嘲り、そのなかにおぼれている同族の人びとを痛烈に攻撃した。ときどきひくく鼻を鳴らしたり、声にだして笑つたりした。彼はイスラエ

ルのことをおれの赤ン坊と呼んだ。おれの赤ン坊はおれを必要としている。おれは体を使う仕事はできないが頭と手は何かの役にたつだろう。ニューヨークでおれは誰かに必要とされたことがいままでにあっただろうか。口さきだけで旧約聖書をほめそやしてそれが何になる。おれの赤ン坊は聖書じや育たない。必要なのは建築資材だ、小麦粉だ、道路だ、水だ、木だ、外貨信用だ、新聞だ、経験だ。おれはニューヨークにはあきあきするくらい暮らした。これからあとの人生は小っちゃな赤ン坊にくれてやってもいいじゃないか。おれは誇りをもつて帰つてきたわけだ……

彼は自分に向かつて言いきかせているのか私に向かつて話しているのか、熱中のあまりけじめがつかなくなっているようなところがあつた。その口調には、どこか、情事の秘密をうちあけるみたいなの、憚られるほどの、噎れてふるえるものがびくびくうごいていた。彼はなおも、妻のこと、子供のこと、イスラエル国家のさまざまな困難などについて話しつつけた。そして、何を思ったのか、その話のさいちゆうに、とつぜん黙りこんだ。崖のはしにたっていた彼は、ちらと夜の底にちりばめられたハイファ港の無数の灯を眺め

「……まるで悩みがないみたいだ。まるで悩みがないみたいだ。ありきたりだけれど強い印象だね」

ひとりごとをつぶやき、さつさと踵をめぐらして暗がりからでていった。何か話のほかのこ

とで苦しんでいる様子が感じられたが、私にはわからなかった。私たちはならんでハイウェイのはしを歩き、山の中腹にあるキャフエヘビールを飲みにおりていった。

毎週のことながら、この国の「安息日^{シヤバト}」の習慣が私をおどろかす。その徹底ぶりが珍しく思えてならなかった。金曜の夕刻から土曜の夕刻まで、すべての人が休む。銀行も、官庁も、法廷も、市場も、屋台の天ぷら屋も、いつさいの機能がとまる。午睡^{シユダス}の時刻のスペインの町のようには、はげしい陽のなかでこの国は死ぬのである。宗教的な戒律としては、安息日には労働をしてはならないということになっている。また、刃物を使ったり火を使ったりしてはいけないということになっている。ひげを剃るのもいけないし、タバコを吸うのもいけない。どういうわけかわからないが電気カミソリだけは使つてよいというので電気屋の店さきには世界各国の電気カミソリが山と積まれている。デイヴィッド・ソロモンの説明によれば、電気カミソリは刃物ではないということになっているという。ではどうしてひげが切れるのだと聞くと、あれは摩擦によってひげをコソギおとすのだという。刃物というものは大なり小なり何だつて摩擦でコソギおとすものではあるまいかと聞きかえすと、宗教は科学とちがつてどんな矛盾でもみとめるのだと逃げた。

「おまけにあなたの国には大きな川がないのだから電気は水力じゃなくて火力でしょう。してみれば電気カミソリは火を使っていることになる。ホテルでは給仕が私にタバコを吸うなど

いう。いくらこちらが、異教徒^{ジエントイル}だから見のがしてくれといっても聞かないのですよ。その厳密さに対して電気カミソリは余りに寛容すぎるのではありますまいかね？」

「そう、そのとおり、小さな矛盾ですな。非常に小さな矛盾です」

安息日にはすべての人が家にひきこもり、お祈りをするか、本を読むかにふけて、外出しない。金曜の夕刻、土曜の午前と午後いっぱい、町には猫一匹の影も見えなくなる。町だけではない。郊外も農村もすべてがそうなのだ。町の道には異様な静寂のなかに壁の影が射し、赤い畑にはシトロンの影が射している。人間という人間はことごとどこかの穴にかくれてしまう。金曜の夜になると人びとは頭に帽子(帽子なら何でもいい)をのせて礼拝堂^{シナゴーク}に行く。礼拝堂では男と女は別べつの席にすわり、少年合唱団と一人の主教の合唱にあわせて合唱する。ユダヤ教は偶像崇拜を禁ずるので、壁には磔刑の像もなければ受難画もかかっていない。また、僧が壇上から会衆に向かって説教をするということもない。めいめいは合唱しながら好きずきのことを考え、好きずきのことをひたすら内心に祈るだけでよいという。やがて合唱の波が高まってくる、夢中になって体をゆすぶる者がでてくる。バッタのように体を前後にはげしい動作で折ったり、起したりする者もある。これは自然の歓喜、法悦の表現で、ああせずにはいられなくなってくるのだとデイヴィッドが説明してくれた。ああして体をゆすぶっていると悪霊が体のうちから逃げていくのだということにもなっているのだと教えてくれた。礼拝が終ると、